

# カリマンタン試行錯誤

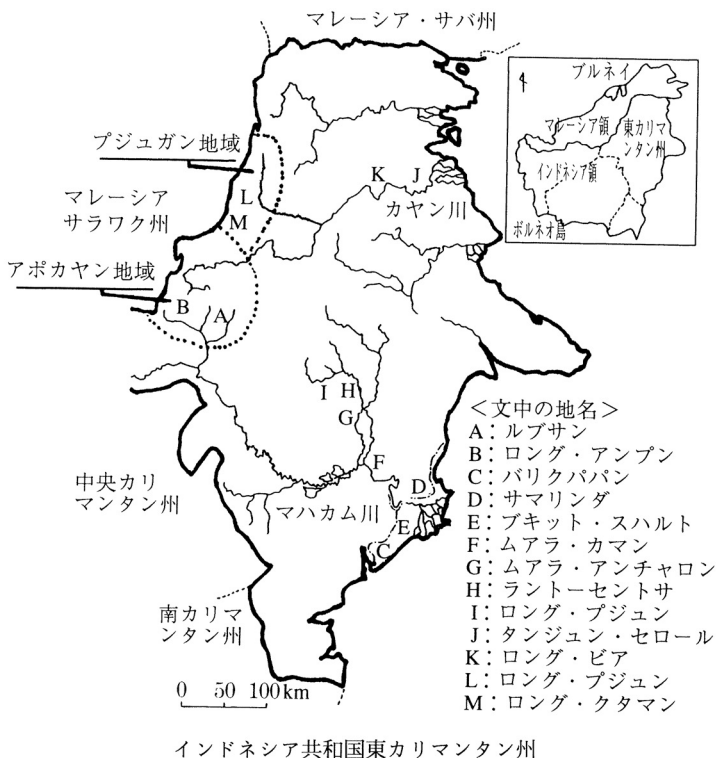
大 松 美 帆

## はじめに～憧れの熱帯雨林の生活～

1996年の春から井上助教授主催の地域研究ゼミが始まった。私はその席で井上さんのアボカン踏破計画を知った。ここ数年井上さんは、数名の学生を伴ってインドネシアを訪れていた。これは学生にとってインドネシアの森林とそこに住む人々についての魅力に直接触れ、フィールドワークの片鱗を経験する最高の機会であった。過去の計画に参加した学生や先輩方からは、それが肉体的にも精神的にもかなりのハードワークであったことを聞かされていたが、これを逃す手はない。「熱帯雨林の生活」(井上真著, 築地書館)の舞台を訪れる絶好のチャンスである。名乗りを上げたのは6名の学生であった。

10月6日から11月6日に及ぶ行程のメインイベントは、ルブサン～ロング・アンプンの10日間トレッキングであった。これはマハカム川の支流から分水嶺を越えてカヤン川流域に辿り着くという、かなりハードなルートである。日本国内での情報収集が不可能なため、具体的な計画は、ルブサンに入って地元の情報を得てからということだった。トレッキング中の食料は、井上さんの過去の経験から、米と乾燥牛肉を携帯し、魚が釣ればそれを食べるということになった。ただ、健康上の問題、特にマラリアについては、予防接種もできないし、罹患すれば高熱のため徒歩での移動が不可能になるので、出発前から再三の注意と具体的な対策についての指示があった。

正直なところ、現地の状況に応じて行動を決定するという柔軟なやり方に、不安を感じずにはいられなかった。しかし、参加を取りやめるつもりは毛頭なかった。10日間も熱帯雨林の、しかも人里離れたところに行くということは、熱帯林研究を志す学生にとって、これ以上ないほどの喜びだ。だが、期日まで



に目的地ロング・アンブンへたどり着かねば、我々は帰路の飛行機を逃すことになる。渡航を前に、いやがうえにも緊張感が増すのであった。

### まずはカリマンタンへ

久しぶりのジャカルタは雨上がりで、湿度のある空気がインドネシア独特の香り混じり、不安と期待に揺れる我々の心境をより一層重くした。そのせいか、インドネシアの初日はよく眠れなかった。

翌日、バリクパパンからは陸路でサマリダを目指した。バリクパパン郊外はこぎれいな住宅地が広がり、あちこちで工事が進められていた。ちょうど中間地点であるプキット・スハルト演習林周辺では、かつての早生樹の植栽地が立派な林となって道路を覆っていた。これは1994年にBlajar熱帯林の研修旅行で訪れたときには、まだ植えられて間もない苗木だったので、いたく感動した。コショウ畑跡地を過ぎ、濁ったマハカム川にかかる大きな橋を渡り、サマ

リンダに到着した。

さて、準備万端と涼しい顔をしている井上さんをよそに、我々学生はこれからの行程のことを考える度に、あれこれ話し合いをした。なにより、互いの安全のためにも無理はしないということを約束した。

翌朝さっそく、井上さんの友人ルガン氏（ケニヤ人）にお会いした。彼は、マハカム川上流域の高校の英語の先生だ。これから我々と一緒に行動をとともにしていただく、大変心強い味方である。

朝食後、今後の行程についての説明がなされた。しかし、その内容は我々の緊張感を萎えさせるものだった。というのも、往路の飛行機便について、日本からルガン氏経由でミッション系チャーター機の予約を試みていたがこれが上手くいかず、これから新たに定期便の予約を試みるということだった。早くも出鼻を挫かれた。一瞬、行き場を失った高揚感と、危険が取り敢えず目の前から遠ざかったことによる安堵感が交錯する雰囲気漂った。しかし、すぐに気を取り直して、新たな予約が取れるのを待った。そもそも具体的な計画はこちらで立てるという予定だったではないか。

### いきなりの出発延期～ラントーセントサへ～

午後3時頃、井上さんはロビーに学生を集めると、東カリマンタン州の地図の前で説明を始めた。どうやら計画変更の様子だ。まず、往路も定期便でロング・アンブンへ入り、そこからルブサンまで徒歩で往復するという事になった。幸い、往路の定期便は1週間後の予約ができそうだ。そこで出発までの間にマハカム川中流域のラントーセントサ集落に行こうという話になった。ところで、恐るべきことに、この時点で我々のトレッキング距離は当初の2倍になったのである。体力が続かない人は途中の村で皆の帰りを待てばいいということになったが、正直なところおいてきぼりはくいたくなかった。

その日の夕方、同じく井上さんの友人のイギン氏にもお目にかかった。やはり、ルガン氏同様、ケニヤ人の男性は、人前でニヤニヤしないらしい。ぴしっと筋の通った誠実そうな人だなとの印象を受けた。イギン氏は、大学の職員であるが、さらに上級の公務員になるべく私立大学の夜間部で勉強中で、本日の夕食会へも講義を終えてからの参加であった。

翌朝、宿を出て、ミニバスで港へ向かった。船着き場は、乗船客がごった返しており、船がこの地域の重要な交通手段であることがうかがえた。出発にはまだ時間があったが、寝場所を確保するために、既に何人かの乗客が乗り込ん

でいた。航行中は皆リラックスした体勢、すなわち、横になって過ごすことになるらしい。老若男女すべてが、船の中でごろりとする、何とものんびりした船の旅である。

我々の船は、夜半過ぎには、ムアラ・カマンから北上してマハカム川の支流に入った。翌日の午前中には、郡都ムアラ・アンチャロンに到着した。このところ雨がなく川の水位が下がっていたため、ムアラ・アンチャロンからはチェス（船外機、クティンティンとも呼ばれる）付きの丸木舟に乗りかえてラントーセントサへ行くことになった。2台の丸木舟は大きめではあったが、乗り込んだ誰か一人がバランスを崩しただけでもひっくり返りそうだった。定期客船の緩やかな航行と打って変わって、丸木舟は軽快なスピードで川面を突っ走った。

川の両側にはバナナの林や焼畑耕作地が見えた。川の水位が低いので赤茶けた崖が川を挟む壁のように続いていた。途中見かける小さい集落ではたいてい、この崖から丸太に切り込みをいれた階段を川面に下ろし、係留した筏の上に洗濯場とトイレ用の囲いを設け、その横に丸木舟を横付けしていた。おそらくこれが標準的なケニヤ人の生活の様子なのだろう。そのような集落のひとつがラントーセントサであった。初めて訪れるケニヤ人の村は意外なほど開けていた。村は川に沿うような細長い形で、メインストリートの両側に家が並んでいた。道は舗装はされていないがきれいに手入れがされており、教会や広場もあった。

はじめから我々はイギン氏の親戚のプルサット氏宅へお世話になるつもりであったが、連絡のつけようがないので突然伺うことになった。案の定、お宅には人の気配がなかった。皆、畑に出払っているらしい。とりあえず荷物を置かせてもらおうと、玄関先にザックを並べていると奥の部屋からお爺さんが出ていらした。突然大きな荷物を携えたよそ者が8人も押しかけて来たので、お爺さんを驚かしてしまったに違いない。ここはまず、ルガン氏にケニヤ語で我々のことを説明してもらい、安心してもらえるように努めることになった。井上さんとルガン氏の真剣な対応ぶりに、「熱帯雨林の生活」で井上さんが老人や子供に槍や山刀を突きつけられた場面を思い出し、冷や汗が出た。お爺さんはニコリともしない。井上さんとルガン氏がお爺さんに対して敬意を表していることは私にもよく解ったが、はたしてお爺さんは我々のことを歓迎してくれるだろうか。あとでプルサット氏の娘さんに逢うまでは、私は生きた心地がしなかった。

次の日、プルサット氏の畑へ行って見るようになった。朝食後、丸木舟に乗り、集落の上流へ行き、そこから30分歩いて畑へ入った。焼畑には陸稲が植えられていた。出作り小屋に荷物を置き、我々は除草作業を手伝った。稲によく似たアランアランの除草なのだが、ヘッピー腰の我々では、仕事は思ったように捗らず、高い気温と強い日差しですぐに

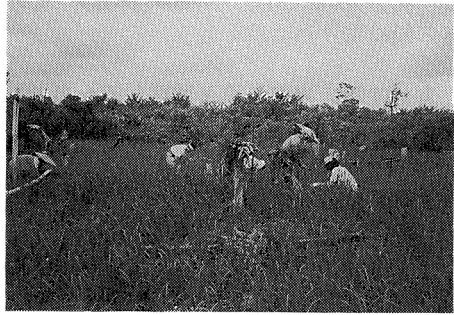


写真 1 焼畑で除草作業を手伝う（写真提供：柴崎茂光君）

参ってしまった。日が高くなる前に作業を中断し、食事当番を残して、他の人達は小川へ貝を取りに行った。これは夕食のおかずとなった。出作り小屋で頂いた昼食は最高だった。決して特別な料理ではなかったが、作業の後で皆が打ち解け合い、お腹も大変すいており、これ以上ないほど素晴らしい食事であった。

午後になると空模様が変わったので、我々は作業を簡単に済ませ、雨の降らないうちに家に戻るようになった。しかし、熱帯地方のスコールはすさまじく、すぐさま我々の乗った丸木舟を豪雨が襲った。スピードのある丸木舟に乗ったまま大粒の雨にあたると痛いのだ。川で水浴びをしたあと夕食をいただき、夜更けはランプの明かりの下でおしゃべりを楽しんだ。家の人との心和むひととき、我々は一人ずつ、ケニャ風の名前を付けてもらった。この名前が後に、行く先々で人々に親近感を持ってもらえる一助となったのは言うまでもない。私は「ウライ」という名を付けてもらった。

さて、その翌日は、ルガン氏の奥さんの実家にお世話になるつもりでラントーセントサから更に上流のロング・ブジュンに向かった。しかし、ルガン氏の義母は焼畑に出払っていて、数日は戻れないそうであった。

我々は、ここから少し上流の産業造林地へも足をのばしたり、翌日の日曜日には、村の教会へいき、人々の前で自己紹介をしたりと、有意義な体験をした。

夕方、ロング・ブジュンを後にして、ラントーセントサへ帰ってきた。今日も夜は車座になり数年前に井上さんがこの村で調査を行った時のことなどを話の種に、夜遅くまでお酒を飲みながら和やかなひとときを過ごした。

ラントーセントサでの素晴らしい日々は名残が尽きなかったが、我々はアポ

カヤンを目指さなければならなかった。翌朝、涙のお別れをしてサマリンドア行きの船に乗った。

### カリマンタンのへそを目指して～カヤン川溯行～

サマリンドアに戻ると、往路のロング・アンブン行き飛行機のチケットを購入するため、すぐに航空会社の事務所へ向かった。いよいよメイン・イベントに突入するのかなと思うと、気持ちが逸った。正直なところ、これ以上の予定変更で気を揉むのはうんざりであった。フライングが続くと、気持ちの立て直しが難しくなるからである。

しかし、どういう運命のいたずらであろう。我々は、そこでまたもや計画変更を余儀なくされたのであった。なんと3日前から、ロング・アンブン飛行場の滑走路舗装工事が始まり、飛行場そのものが閉鎖されてしまったというのである。今からではどうすることもできない。我々は、一度ならず、二度までもアポカヤンに拒絶されてしまったのだ。しかし、井上さんの決断は素早かった。我々の目的地はアポカヤン地域の北に隣接するプジュガン地域へ定められ、その場でタンジュン・セロール行きの航空券を手渡されたのであった。

行き先は決まったものの、我々は思い通りに行かないインドネシアの物事にすねたような気持ちになっていた。そんな折り、井上さんは我々を市内の Bar に連れだしてくれた。こういう気持ちの切り替え方もあるようだ。

翌日、気分を一新した我々は、カリマンタンの奥地を目指すべく、サマリンドアの空港に赴いた。午後2時半、タンジュン・セロール方面への飛行機が、ほぼ定員に近い32名の乗客を乗せて離陸した。折しも、夕立には少し早い大粒の

雨が降り始め、双発のプロペラ機は、積乱雲に突っ込んで行くかのようにサマリンドア空港をあとにした。飛行機は乱気流に見舞われるたびに急降下し、気分を悪くする人が続出した。さしずめ空の難所といったところだろうか。実際たまたま墜落するらしいことを後で聞いて怖くなった。しかし、雲が切れ、視界が開けると、見渡す限りの樹海が眼下に広がった。一箇所



写真 2 カヤン川上流部の激流 (写真提供: 柴崎茂光君)

のPATCHもない美しい緑の絨毯が広がっていた。生まれて初めて空から見る熱帯雨林であった。

ものの1時間半ほどでタンジュン・セロールに着いた。ここは、カヤン川の河口にある流域最大の地方都市である。この川の最上流部がアポカヤンであるが、上流部では危険な激流が連続しているため、航行は不可能である。

翌日、我々は定期便でカヤン川をロング・ピアまで溯るために、船着き場へ向かった。タンジュン・セロールを発つとカヤン川の川幅はすぐに狭くなり、心なしか流れも速いように思われた。しかし、川から見える集落の様子はマハカム川のそれと大差はない。ただ、カヤン川の両側には急峻な山がそびえ、森林も広がっていた。

夕方、目的地に到着し、さらに上流に行くための情報収集をおこなった。どうやらここから先へ行くには、カヤン川上流の森林産物を集荷している中国系商人のロングボートを頼るしか手段がないようであった。月曜と木曜の週2回、ロング・ピアから上流に向かうらしかった。井上さんはさっそくその商人に会いに行った。商人はチャーターを勧めたが、井上さんがねばり、料金はもとより、集荷船の出発日を変更して、我々がそれに同乗できるように話を付けてきた。

翌朝、7時半、ロング・プジュガンへ向けて船が出発した。全長10m前後、幅2m程度の深めにできたその船には、日本製のエンジンが3基搭載され、爆音とともに水量の増したカヤン川の支流を溯った。船頭は一度に3人ずつ、数時間交代でアクセルを握り、船首には水先案内人が立ち、大きな岩と岩の間をすり抜けるように船を進めた。時折、船は鳴戸海峡の渦潮を思わせる激流に巻き込まれ、大きく傾き、我々は冷や汗をかいた。途中で降りた木材会社の人達は各々救命胴衣を身に着けており、船が転覆することも充分あるのだと推測された。我々はルガン氏の指示に従い、靴を脱いだ。船から投げ出された場合、泳げなくて危険だからである。川幅が広くなったり狭くなったりを繰り返し、我々はその度に波を被り、船にしがみついた。切り立った山々を見上げながら更に上流を目指すうち、とうとう日が西に大きく傾いた。川を渡る風が肌寒くなってきた頃、突然、前方の視界が開けて、それと同時にあんなに濁っていた川の水が変わった。泥を含まなくなった川の色は緑色がかって澄んでおり、角の丸くなった石が川床に見えた。ロング・プジュガンについたのもであった。

ロング・プジュガンで一泊した後、我々はロング・クタマンへ徒歩で移動することになった。集落を過ぎると焼畑用地にさしかかり、なかには水田も見受

けられた。ロング・プジュガンで頼んだ道案内の人は、我々の様子をいろいろ気遣ってくれながら、足取り軽く先頭を行った。しかし行く手には、上り下りのいくつもの坂が、我々の前に立ちはだかっていた。まるでカリマンタンの大地に刻み込まれた深い皺のようである。アップダウンを繰り返して木陰ひとつない炎天下を黙々と歩くのは、とてもきつかった。日差しを避けて、かけ込むようにして森の中に入ると、そこは一種独特のにおいがする湿度の高い空間だった。道はもう何年にもわたり踏み固められているのだろうか、しっかりと形作られ、人の往来が途切れないことを表していた。途中、小雨がぱらつき、気温と熱射でオーバーヒート気味だった身体に心地よかった。雨が止む頃、思っていたよりも早く我々はロング・クタマンに辿り着いた。

翌日は1日かけて、ロング・クタマンの村の共有林を見に行っただ。村を見下ろす尾根沿いにはメランティの見事な大木や果樹やラタンもあり、人々が利用しているにも拘らず、とても豊かな森林であるとの印象を得た。蛭に噛まれながらも、ここまで来た甲斐があった。村のすぐ横を流れるカヤン川の支流は、もはや舟が通れるだけの深さはなく、本当に奥地に来ているんだなと実感した。

## マラリアの恐怖

もと来た道をたどって、ロング・クタマンをあとにし、昼過ぎにはロング・プジュガンに到着した。宿に戻り、荷をほどこき、ロング・クタマンでの出来事を胸に各自がくつろぎ始めたその時、突然H先輩が体の異常を訴えた。今朝から体の調子が悪いことは聞いていたが、とうとう発熱した。まずは井上さんに報告し、これから数日間、マニュアルにしたがって様子を見ることになった。この発熱が単なる疲労によるものか、あるいは風邪によるものか、それともマラリアによるものかを、まず見極めなければならない。

翌朝、ロング・ピアに移動するため、我々は約束しておいた船に乗り込んだ。船には、この地域から集められた林産物が積み込まれていた。

H先輩は、昨日からの熱が余り下がらず、憔悴した様子で船に乗り込んだ。昼下がりロング・ピアに到着し、早速、宿でH先輩を安静にした。マニュアルどおりの治療を発熱当初から行っているにも拘らず、快方に向かう兆候は見られない。あと一日、このまま様子を見て熱が引かないようならば、マラリアの治療を開始しなければならない。我々も少なからず戦慄を覚えた。何故なら、今まで個別行動を殆ど取っていない我々も罹患している可能性があるからだ。



深夜、既に一度マラリアを経験している H 先輩の主張と井上さんの判断で、クロロキンの投与が開始された。H 先輩は発熱してからというもの、食事が喉を通らなくなり、日本から持参したスポーツ飲料の粉末を水に溶かしたものとブドウ糖タブレットで過ごしていた。

発熱してから3日目の朝、土気色の頬をした H 先輩を移動させるのは余りにも痛々しい気がした。依然として熱は下がらない。しかし、敢えてタンジュン・セロールを目指すことにした。H 先輩に回復の兆しが見られない現在、少しでも都市部に近い方が今後の対応の仕方も確実だと判断からだ。船の床に板を渡して、H 先輩はシュラフに入ったまま、バナナの葉で作った日除けをかけて出発した。

途中、H 先輩は悪寒を訴えるも、大変気丈であったため、かえって気を弱くしていた我々が元気づけられた。思っていたより短時間にタンジュン・セロールに戻ってくることができ、さっそく宿で看病が始まった。H 先輩の体を冷やすことはもちろん、身の回りの世話、細かい用足し等、手のあいている者がそれぞれできることを受け持った。

マラリア対処法のマニュアルに従うと、クロロキンを使用すれば普通の三日熱マラリアは治るはずであった。しかし、投薬後の様子を見ても、H 先輩の容体は快方に向かうどころか、一時的に熱が下がりはしたが、またすぐに元に戻ってしまった。どうもクロロキンが効かないらしい。我々は少なからず焦った。

幸いタンジュン・セロールには電話があるので、井上さんは日本のマラリア専門医に指示を仰いだ。すると、致死率の高い熱帯熱マラリアの可能性が大きいということで、直ちに第3段階の投薬が試みられた。もう事態は一刻の猶予も許されなくなっており、とうとう最後の頼みの綱、メフロキンが用いられたのであった。

さて、H 先輩を病院へ搬送するため、数少ないサマリンドへの定期便を逃すことはできなかった。それはわかっているのだが、重病人にサマリンドまでの「空の難所」越えをさせるのはとても忍びなかったのも事実である。H 先輩の熱はメフロキンが効いて劇的に下がってはいしたが、早くも副作用で、めまいと手足のしびれを訴え、もちろん歩くこともできなくなっていた。

サマリンド到着後、H 先輩の入院先をサマリンドかジャカルタ、どちらの病院にするのか決断がなされた。結局、井上さんは日本大使館とコンタクトを取り、ジャカルタの病院で治療を受けられるよう段取りをつけることができた。

バリクパパンまでの車と、ジャカルタまでの航空券の手配も完了し、井上さんとH先輩は翌日にはジャカルタに到着できる見通しが立った。我々残りの学生も、それぞれ帰国までの予定を確認しあった。

午後、井上さんが、解散を宣言した。ルガン氏ともここでお別れだ。長いようで短かった、我々のカリマンタンでの行程は終了した。皆それぞれに今日までの健闘をたたえ、堅くそして熱い握手をかわした。帰国前日にジャカルタの空港で会うことを約束して、我々はカリマンタンをあとにした。

### あとがき

帰国日に空港に集まった我々は、ジャカルタの病院で入院治療を受けて自力で歩けるまでに回復したH先輩と井上さんの姿を見つけて、本当に安堵した。

およそ1か月に渡って寝食をともにし、現地の人々とのふれあいに一喜一憂した我々は、現在それぞれ自分のフィールドを目指している。それというのも、フィールドワークを通して森林に生活する人々と関わり、将来、少なからず彼らの良き理解者となることを強く希望するからである。

私自身はこの得難い経験を生かし、次は、自らを頼りにベトナムに乗り込んで行く覚悟である。そして、そこで営まれている熱帯雨林の生活に深く関わっていきたい。

最後に、現地でお世話になったルガン氏をはじめとする東カリマンタンの皆さん、日本大使館と関係諸機関の方々、悲喜こもごもを分かち合った森林生態社会学研究室の柴崎茂光君、林原信行君、林政学研究室の原田一宏氏、笹岡正俊君、田中 求君、そして旅行中から様々な助言を与えてくださり、このエッセイを書くことを勧めてくださった林政学研究室の井上 真先生に、この場を借りて厚くお礼を申し上げたい。